

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 55
2015年 2月



クリスマスに集まり再会を喜ぶイスラエルとパレスチナの若者たち。(エルサレム：ノートルダムセンター)

一連の痛ましいそして残虐な事件の犠牲となった方々のご冥福を心から祈ります。人々の心に憎悪と恐怖が増幅している今、暴力の連鎖に歯止めがかからなくなること危惧しています。若者たちがなぜ過激思想に引き寄せられ、暴力に手を染めていくのか、その根本にある原因をしっかりと見据えなければなりません。

紛争や貧困で苦しむ地域だけでなく、「民主主義」を標榜する国々ですら、社会の底辺で差別と貧困に苦しみ、日々絶望している若者が数多くいます。「テロ」への報復を叫ぶ前に格差をなくし、全ての人が夢と希望を持てるようにしなければ、「平和への道」は閉ざされたままでしょう。

私たちにできること、そのひとつが聖地の子どもたちへの教育支援だと信じています。皆様の変わらぬご支援をお願いいたします。

理事長 井上 弘子



NPO法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX **03-6908-6571**

E-mail : ispalejpn@google.com

ホームページ : <http://seichi-no-kodomo.org>

郵便振替 : 00180-4-88173 加入者名 : NPO法人 聖地のこどもを支える会



Accountability
Self-Check 2008

当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると認定されました。

日本の支援者の皆様

皆様には、長年にわたり、困難な状況にある聖地の子どもたちをご支援いただき、エルサレムの連帯事務局長クラウディオ・マイナおよびスタッフ一同、心より感謝申し上げます。皆様の途切れることのないご支援のおかげで、子どもたちは精神的にも社会的にも、将来を担える人となるために必要な教育を受けることができております。また、昨年末には、里子たちにクリスマスプレゼントを贈ってくださり、ありがとうございました。皆様の温かいお心遣いのおかげで、子どもたちはクリスマスの喜びを心から味わうことができました。

貧しく恵まれない子どもたちの生活を少しでも改善し、将来に希望を持たせるという私たちの使命は、皆様の寛大なご支援があるからこそ遂行可能となっております。私たちは、今後も、ご支援いただいている子どもたちとできる限り連絡を取り、皆様に彼らの生活環境をご報告できるよう努力して参ります。このようなやりとりを通して、子どもたちが、「困難な中でも、いつも寄り添ってくれている人がいる」ということを感じてくれればと考えております。

先日私は、エルサレムの《テラ・サンクタ・スクール》を訪ねました。その時、里子の一人、ジャミール・ユーセフ・カーデル君と30分ほど話すことができました。彼は、里親をはじめとする皆様からのご支援について、次のように話していました。

*ジャミールは幼稚園の時から、すでに6年間里子として援助を受けている。

「神様って本当に素晴らしい。ぼくはすごく感謝してるんだ。だって、助けてもらって



ジャミール（右端）

るから、この学校で勉強を続けることができるんだから。ぼくの夢は、もっと勉強して、立派な宇宙エンジニアになることなんだ。もちろん今の援助がなければ、夢を叶えられないことはよくわかってる。パパは去年9月に心臓病で亡くなってしまった。それに、ママは身体障害者だから、ぼくと二人の妹がいてもちゃんと働くことができない。時々、あちこちで家政婦の仕事をして、何とか食べさせてくれてはいるし、ぼくも夏休みにお店で働かせてもらって、少しはお金を稼いでママにあげているけれど……。だから、ぼくをずっと助けてくれている人に、なんてお礼を言っていればいいかわからないんだ」

彼の言葉は、皆様のご支援が、聖地の子どもたちの生活の質の向上にどれほど役立っているかを示しています。改めて皆様に心からの感謝を申し上げるとともに、今後ともご支援くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

2015年1月30日

ヘイル・フーリ

聖地における学校・学院のための
連帯事務局

事前研修の報告と参加者の感想

スタディツアー〈平和を願う対話の旅〉2015



1月24日(土)～25日(日)にかけて、JICA 東京国際センターにて、「平和を願う対話の旅」事前研修が行われました。ツアーに参加する8名の学生が集い、スタッフおよび関係者も交えて、3月に訪れるイスラエル・パレスチナについて学び、平和について語り合いました。

初めに、駐日イスラエル大使館公使ペレグ・レヴィ氏とパレスチナ総代表部一等書記官のヒシャム・ナサル氏より講演をいただきました。またお二人の間に、厳しい現実を踏まえながらも非常に友好的な対話も行われ、質疑応答では学生から積極的な質問が飛び交いました。

その後、事前に出題した議題の発表や、イスラエル人・パレスチナ人の立場になって現状を見つめるロールプレイング等を行いました。

2日間を通じて、学生たちはこれまで知らなかった現地の状況を知り、平和のために自らできることは何か、考えを深めることができました。

事前研修後の参加者の声を通して、彼らのスタディツアーに向けての決意を皆さまにお伝えします。

参加者の感想

阿部 凜

覚悟という言葉や、心のなかで反芻しています。五感をフル動員して、いま持てる全てで、パレスチナ・イスラエルの文化や歴史、生活、そこに生きる人々の喜びや悲しみと向き合う。平和へのアクション、その礎となる関係構築にこの旅では全力を尽くしたいと思います。

花田 真凜

このスタディツアーではしっかりと人に「自分」を伝え、またその相手のことを認め、受け止めていくことで友情を広げていきたいと思います。そしてその対象は、イスラエルやパレスチナの人々に限りません。もう既に、このスタディツアーで出会ったメンバーとの間にも「平和」が始まり、広がっていると思います。否、広がっていかなければなりません。なぜなら「平和」は遠くにあるものではないと思うからです。「平和」は常に自分から、そして「目の前の一人」から築いていかなければいけないと思います。

高橋 秀哉

女性・子ども・老人・障がい児者・病人など社会に対して訴えることが困難な人たちの声を少しでも多く拾い上げて社会に届けたいです。また、自分と同じところ、似ているところを見つけることで互いの理解への一歩としたいです。そして、イスラエル・パレスチナのどちらか一方偏った見方をせず、常に両方の視点をもつよう心がけたいと思います。

石上 そのみ

まずは、実際の現場がどのようなものであるかを知ることが重要です。例えば分離壁であれば、どのくらいの高さや構造をしていて、どう人々を妨げているのか、または自衛のための役割を果たしているのかなど、資料を読むだけでは分からないことや不十分なことがあると思います。また、現地の人との交流によって、人々の本音や生活もより理解できるようになるといいと思います。

本吉 祐樹

実際に現地を訪れることで、これまで間接的にしか触れてこなかった部分をより深めていきたいです。また、自らの専門である国際法にも、彼らの“声”を生かせるように、困難を抱えている人たちの目線に立って様々な交流やプログラムに臨みます。スタディツアーや事前研修などを通じてイスラエル、パレスチナを含む中東地域についてもより関心を深めていきたいと思っています。

斎藤 鉄也

スタディツアーでは、昨夏の東北スタディツアーを通じてできた友人に再会すること、これまでの旅行とは大きく異なった体験ができることを期待するとともに、帰国後の活動に役立てたいと考えています。私は、イスラエルやパレスチナを取り巻く環境を中心に勉強しようと考えていて、今回のスタディツアーはその準備段階となります。さらに、周囲の人にもイスラエルとパレスチナの問題を自分に関係のある問題として捉えてもらえるように、その体験を共有出来れば良いと考えています。

家中 彬博

（イスラエル・パレスチナ両大使館外交官からのお話を通して）研修開始からわずか3時間で「ホロコーストへの怒り」を肌身に感じることでなりました。理性や知性だけではどうにもならない、センシティブな問題があるということを改めて感じました。

ここにきて、面接時における井上代表のある言葉が思い出されます。「あなたの平和は、平和じゃないと思う」

自分は、永遠的、人類的な平和実現の難しさのあまり、平和を「さしあたって対立はあっても、暴力の次元に転換しないもの」と面接で答えました。しかしそれは、“実現なき平和”、あるいは“ゴール”なくして“プロセス”を語り続ける矛盾した語り口だったと今は感じます。事前研修での経験をふまえ、今後のスタディツアーを含むイスラエル・パレスチナとの関わりあいについて、文字の「中」だけ

で考えるのではなく、「外」で感じる柔軟性を積極的に身につけて行きたいと願うばかりです。

矢野 美幸

イスラエル・パレスチナの人々は、私たちと同じように日々を楽しみ、家族や友人と心温まる時間を過ごしていると思います。しかし一方で、日常と地続きに恐怖があって、いつもどこか怯えながら生きているのではないのでしょうか。一年の中で、必ずどこかで同じ国民の誰かが“敵”に殺されるニュースを聞く。友人が自爆テロに巻き込まれる。自宅が軍に壊される。全ての財産を幾度も失う…。理不尽なことばかりです。日本で生まれ育って、何不自由なく守られて育ってきた私には、何も言えないです。

ただ今回、イスラム国を名乗るテロ組織によって邦人のお二人が残忍な形で殺害されて、初めてイスラエル・パレスチナの人々の気持ちが少しわかったような気がしました。相手への嫌悪感、同じ人間として信じられないような気持ちが湧きました。彼らはこんな風に心が痛む出来事を、私の何倍も見聞きして育ってきているはずで、平和な社会で生きてきた私と同じ感覚で、同じ意見を持っている訳は無いと思います。

セキュリティの確保の必要性は今回痛感させられ、最悪の場合を想定して対策を練る大切さを感じました。それでも、理想論のようですが、対話と和解の道を探り続ける努力を並立して続けなくてはならないと思います。

今回のスタディツアーで、まずイスラエル・パレスチナの人々と友達になった上で、可能ならば少し踏み込んだ話がしたいと考えています。心の奥にどんな痛みを抱えているのかをよく考えた上で、彼らはどのように敵対する相手を見ているのか、現状に対してどのような意見を持っているのか、双方の人々と関わり、話を聞く中で、両者にとって建設的で希望のある方向を見出したいと思っています。平和とは何か、暴力とは何か、戦争とは何か、深く考え、世界の現実を直視するような思想を持てたらと考えています。

「イスラム国」を名乗るテロ組織による日本人の人質殺害事件は、テロへの対処を含め国際問題に日本がどう取り組むかという課題を突き付けました。

人質殺害の予告という声明は、安倍首相が外遊先の中東で「ISIL(注)と戦う国々に対し、人材開発やインフラ整備をするために2億ドルの援助をします」と表明したことをとらえたものでした。

首相発言のこの表現が、日本を敵対国だと定義づけを誘う軽率なものだったと指摘する声が、主に中東情勢に詳しい識者などからあがっていました。国会で、人質を取られている状況下での支援表明について危険を冒す心配はないかを確認するリスク管理について問われた首相は「リスクを恐れるあまり、このようなテロリストの脅しに屈すると、周辺国への人道支援はおよそできなくなってしまう」と答弁しました。

「脅しに屈しない」と言えば反対しにくいし、強気の言葉は受けがいいものです。しかし政府は、2人が人質になったことを首相の中東歴訪の前から把握していたのです。その間、解放へ向けて何か手を打っていたのかという疑問は別にしても、人命がかかっている状況の中で、人質を押さえている組織に付け入られるような言動がないようにと、首相に対する注意喚起はなかったのかという疑問が残ります。その点で「軽率な発言」と追及されても仕方ないでしょう。

とはいえ、「脅しに屈するな」という声の大きい中で、人質解放に努力すると言っている相手に対するあからさまな批判は、しづらいものです。ましてや総選挙の前あたりから、政府や与党に批判的な番組内容が「偏向報道」だと言われ、テレビ局に自粛というか萎縮ムードが強まってきたご時世。政権批判の声はあまり表に出ませんでした。

そこへ2月1日、ジャーナリストの後藤健二さん殺害が伝えられました。これを受けた朝のニュースバラエティー番組で、コメンテーターの一人が「首相がテロリストの罪を償わせると言っていたが、どういう償い方をさせようというのか」と危惧の念を表していました。

ちなみに、この首相発言をとらえてニューヨーク・タイムズはすぐさま、「平和主義からの逸脱／安倍

首相、殺害への報復誓う」と報じました。日本人の多くは、このような受け取られ方を意外に思いそうです。しかし、国際社会では首相の「罪を償わせる」という言い方は、単なる強い決意を述べる言葉のあやとは受け取られないと思うべきです。

ニューヨーク・タイムズの英語での表現は Prime Minister Abe reacted with outrage, promising “to make the terrorists pay the price” となっています。そして、次のように続けています。「このような報復宣言は、西側諸国のリーダーが過激派の暴力に直面した場合にはよくあるものだ。しかし、対決を好まない日本では前代未聞のことだ」と。

「罪を償わせる」と言って報復する武力を持ち、実際に実行するのがアメリカです。2001年9月11日の同時多発テロに対し、報復として開始したのがアフガニスタン攻撃でした。その結果はテロ組織壊滅には至らず、「対テロ戦争」の名目で始めたイラク戦争も、破綻国家を生み、テロリストの横行を助長する混沌を増やしているのが実情といえるでしょう。

日本はどのような道を選択すべきでしょうか。今は選択の岐路にあるのではないのでしょうか。

後藤さんが結局は殺害されるという衝撃的な結末は、テレビの出演者が安倍政権の姿勢を危ぶむ発言をする空気を生んだ気もします。一方で、公の場で発言を求められれば「テロは許せない」「テロに屈してはいけない」という声の大きいでしょう。では、武力を増強してテロに対抗する体制を固めればいいのでしょうか。

安倍首相の国会答弁を繰り返せば「リスクを恐れ

**支援金の払い込みが
クレジットカードでも
可能になりました**

郵便局に行か
なくてもOK!

当法人webサイト内の、
支援金払い込み窓口から払い込みできます。

聖地のこども

検索

<http://seichi-no-kodomo.org>

るあまり、このようなテロリストの脅しに屈すると、周辺国への人道支援はおよそできなくなってしまいます」となります。こう言われると、もっともなように聞こえます。しかし、人道支援とは必ずしもリスクを抱えながら、それをものともせずやるものではないのでは？「何がリスクを生むのか」が問題で、首相の言い方は順序が逆です。リスクを生まない人道支援というものがあってもいいです。地道な人道支援をしてきた日本だから、また、力に任せて一方的な「正義」を押し付けることを戦後はしてこなかった日本だから、テロの標的とはなりにくかったし、人質に取られた時も当事国の人たちが仲介に動いてくれる例があった、という一面を見るべきだと思います。

9・11 同時多発テロの後、米ブッシュ大統領がイラク攻撃を主張し始めた時、欧州諸国の多くがまだ懐疑的な中、時の小泉首相がいち早く支持を表明したあたりから、国際社会の中での日本の見え方が変わってきたかもしれません。そんな中で安倍政権は、集団的自衛権の行使条件を緩め、アメリカに協力して「自衛のための戦争」に自衛隊を派遣できるようにするのを目指しているようです。そして今回の事件を機に、その目的推進の動きを強める可能性があります。「いつ何時、海外の邦人に危険が及ぶかわからない」として、救出のための自衛隊出動の必要性を強調する好機と見れば、です。

誘拐などを含む危険にどう対処するかは、確かに考えねばなりません。ただし、日本が対テロ同盟に武力的にも貢献する姿勢を鮮明にすれば、非政府組織（NGO）で援助活動をする人たちをはじめ海外にいる日本人が誘拐や攻撃の対象になる可能性が高まることは確かです。

問題は、テロに対し毅然と立ち向かうか弱腰になるかという、単純な議論ではなく、国際社会において、日本がどのような国であろうとするか、の問題だと思います。日本が「国際貢献」という名目の下であろうと、武力を背景にした紛争解決路線に傾くことに懐疑的な人々も、テロ組織が日本人を人質にとって脅してきたら何でも要求を呑むべきだ、という話をしているわけではありません。そのよう

な事態を少しでも防ぐ手立てとして、文字通り地道な人道支援で頼られる国になることを願っているわけでは？。そして、その路線をこれまで以上に鮮明に打ち出すことが一つの道です。

これに対し、自らの武力を高めたり同盟国の軍備に貢献したりすべきだ、というのも一つの選択です。安倍首相は2月2日の国会答弁で、「イスラム国」に対して空爆を行っている有志連合への後方支援は行わないし、日本が空爆などに参加することはあり得ないと述べ、慎重な姿勢を見せています。しかし、集団的自衛権に絡む法整備が進む中で、どのような支援を可能にしようとするのか、見守らねばなりません。

人質が殺害されるという事態を目の当たりにすると、憎しみと怒りで強硬な意見が高まりがちです。一方で、事件を政府の失態だと追及して政争の具にしようとする動きもなおあるでしょう。感情的あるいは打算的な思惑からの議論や非難合戦を排して、日本はどの道を行くべきかを真剣に議論すべき時だと思います。

（元朝日新聞特派員＝中東地域担当）

注） ISIL (Islamic State of Iraq and Levant) イスラム国の旧称で、Levant はシリア、レバノン、イスラエル一帯を指す地名。日本政府は「イスラム国」と呼んで独立した国のような印象を与えるのを避けるため、旧称を使用している。新聞などでは自称であることを示すため「イスラム国」とカギかっこを付けて報じることが多い。

あなたのスキルと心を 貸してください。

認定NPO法人
申請中

NPO運営強化のため、人材を求めています。

● ボランティア

・会計 ・ホームページ管理などの情報発信

● スタッフ (パートタイム)

1日8時間、週3日、当法人に勤務

業務：一般事務 待遇は能力に応じてご相談
パソコンのスキル(オフィスなど)のある方
英語読解力(日常会話程度)があれば大歓迎

お問い合わせは **tel. 090-6538-3255**
事務局まで **email: ispalejpn@gmail.com**

「ぼくたちは夢と希望を捨てない!」

～ガザの少年たちの挑戦は続く～

昨年の空爆で多数の犠牲者を出した町ガザから来た少年たちが、中東諸国の人々の心をつかみ、感動を呼んだ。

サウディ・アラビアのテレビ局 MBC の人気バラエティー番組「Arabs Got Talent (アラブのタレント発見)」でのこと。番組は、アラブ世界の音楽やダンスなど、いろいろなジャンルの才能を掘り起こそうと中東各国から参加者を募り、コンテストを開催している。オーディションに続き、準決勝、決勝と審査が行われて、グランプリ獲得者には高額賞金と高級車、そしてタレントデビューへの道が開かれる。

「Tackt Echarki (オリエンタル・オーケストラ)」という名のグループ、メンバーの年齢は12～16歳。彼らは、素晴らしいパフォーマンスで審査員の絶賛を受けた。演奏の素晴らしさに、審査員も少年たちを支えたスタッフも、そして当の少年たちも、涙を抑えることができなかったという。その結果、特例として準決勝をパスして、直接決勝に進むことになったのだ。

オーディション通過後のインタビューで語られたのは、コンテストまでの長い道のり。

少年たちは、攻撃により廃墟となったガザの瓦礫の中で、練習を続けてきたのだという。コンテストに参加して、ガザにも「才能がある」ということを人々に知ってもらいたかったのだが、エントリーはしたものの、開催地であるレバノンの首都ベイルートにたどり着くまでが大変だった。

彼らがガザ地区から出ていくためには、エジプトとの国境にあるラファの検問所を通らなければならない。3回通過を試みたがいずれも失敗。しかし

彼らはどんなに追い返されてもあきらめず、4回目の挑戦でなんとかエジプトへの入国がかった。

少年たちは語る。「カイロ空港までの道はとっても辛くて危険な道だった。でも、とうとうぼくたちはベイルートへ来た。これからは、神様のおかげで、もっと安心して頑張れると思う。」

コンテストの決勝は2月28日。地元ガザでも少年たちを応援する声がひろがっている。

「音楽は平和とハーモニーをもたらしてくれる」、「少年たちは本当に頑張った」、「ぜひ決勝を勝ち抜いて、ガザに喜びと勇気を与えて欲しい」。



番組での彼らの演奏シーンはインターネットの画像投稿サイト「YouTube」に投稿され、2月現在で1000万回以上再生されています。

視聴は、YouTubeで「Al Takht Al Sharki band」と検索。

青少年交流プロジェクトに支援を!

イスラエル・パレスチナ・日本の青少年を「平和の働き人」として育成するプロジェクトに支援をお願いします。イスラエル・パレスチナへのスタディーツアー、日本でのボランティアという2つの活動を通して、国際交流の輪を広げていきます。

ゆうちょ銀行振込み先

口座番号: 00190-2-389653

加入者名: 平和をつくる子ども交流プロジェクト

お問合せはNPO事務局まで tel. 03-6908-6571



▲ 2015 スタディーツアー事前研修。ペレグ・レヴィ駐日イスラエル公使とヒシャム・ナサール駐日パレスチナ領事を囲んで（JICA 東京国際センター）



▲ 理事も交えて真剣な意見交換。

エルサレム、ベツレヘム、ナザレ……街で出会った子どもたち



▲パレスチナ人家族のクリスマスのお祝い。



▲ベツレヘム、飼い葉桶乳児院にて。名譽殺人を免れた赤ちゃん。



▲ユダヤ人の男の子が13歳になって迎えた成人式（バル・ミツバのお祝い） 4本の棒で支えられた布は、神の天幕の中に入ることの意味します。



▲ハヌカ祭（光の祭り）で、神を賛美するために、老いも 若きも一緒にダンスする超正統派のユダヤ人たち（エルサレム）

写真 井上弘子、浅野耕二、有馬啓介